

大城立裕

花の碑



花の碑

城立裕



花の碑 はな いしづみ

一九八六年七月二日 第一刷発行

著者——大城立裕 おおしろ たつひろ

© Ohshiro Tatsuhiko 1986. Printed in Japan



発行者——野間惟道

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二―三―二 郵便番号二三 電話東京〇三―九四―二三(大代表)

印刷所——豊国印刷株式会社 製本所——藤沢製本株式会社

定価——一四〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

ISBN4-06-202873-5 (0) (文1)

目

次

序章

5

前章

11

後章

119

花^{はな}

の

碑^{いしぶみ}

装幀・志賀紀子

カバー、扉の図版は「琉球王家伝来衣裳」（講談社刊）より。

序 章

玉城朝薫たまぎすくもようくんにとって、この上もなく名譽なことには違いなかった。琉球王国の踊奉行として、これほど華やかな名譽に浴した者は、かつてなかったのである。

享保四年（一七一九）九月九日、玉城では例年のように重陽の宴が催されたが、尚敬王の即位から七年目にあたるとこの年、国王冊封さつぽう（戴冠）のために大清国皇帝から冊封使が派遣されたので、それを歓待する宴となり、その芸能の最高責任者が踊奉行、玉城朝薫であった。三十六歳になる。

享保四年というよりも、清国年号で康熙五十八年としたほうが、このさいはふさわしいかも知れない。琉球王国の公式年号は明清年号をもって慣わしとしてきたからである。ただ、現在の支配者である大和の薩摩藩にたいしては日本年号を用いてきたし、またここで的主人公である玉城朝薫は、鹿児島や江戸へたびたび上っていて、大和芸能を深く身につけたところがあるから、このさいは日本年号がふさわしいともいえる。

今日ばかりは、二十歳の青年国王も百浦添ももらせえ（正殿）を出て、中国使節接見の館にあてている北殿に列した。主賓は翰林院檢討である正使海宝に翰林院編修の副使徐葆光。ともに三十代で、清国政府における大栄達を約束され、詩文の才にたけた官員である。この二人が国王とならんですわり、冠船随行の五百余人から選ばれた清国官員と琉球王府の高官の幾人かが相伴した。

その御前で演じられたのが組踊くみおどりで、この芸の様式を玉城朝薫がはじめて作ったのである。はじめは大和の能楽のような物語劇を作ることを思いたち、かりにそれを戯劇とよんだが、仕上がったとき能楽とはまるで別の形になり、それをとくに組踊と名づけたことも、玉城朝薫の誇がこめられている。

上演した組踊は二曲、その筋書は賓客たちにも漢文で綴って配った。わが国に古来伝わる物語だということだった上で、物語の筋を記している。

『執心鐘入』
しゅうしんかねいり
 『二童敵討』
にどうてきうち

これらの戯劇はすべて玉城朝薫が書いたのだということを、国王尚敬がわざわざ賓客に紹介して、朝薫は恐縮した。組踊といわず戯劇とよんだのは、中国人の理解をたすけるためであるに違いない。通訳をつとめたのは末吉親方すえしりょうかたである。唐名を蔡温さいおんといい、中国から

の帰化人の子孫で北京、福州への留学歴もながい、傑物である。いまは国王の国師をつとめていて、清国高官を歓待するには、最もふさわしい。「戲劇^{シヤユイ}」という北京官話だけは、たまたま玉城朝薫もかねてから聞き知っていた。

しかし、副使徐葆光が見終ったのちに言った。

「これは日本の戯劇に学んでつくったのですか」

観劇後、夜にはいって、守礼門を出はざれたところにある中城御殿^{なかぎょくおでん}（世子邸）で催された別れの宴席でのことである。

「いえ。まったくの創作です」

答えながら、朝薫の胸を複雑な思いがいそいで行き交った。まず、能楽の舞台が浮んだ。『執心鐘入』に物語の似た『道成寺』と、『二童敵討』に似た『小袖曾我』である。これらに学んだと、はたして言えないか。戯劇をはじめて作ろうと志したとき、これらの能楽の面影にひかれたことはたしかなのだ。しかし、能楽の面影がいつしか彼の脳裏から消えたこともたしかなのだ。それがいつからであったか——今年のはじめに書きはじめたら、いつしか能楽を忘れたのだ。

中城御殿の庭前に焚かれた篝火の炎をながめながら、あらためて朝薫の耳朵に、あの組踊の歌声と台詞の音楽的な誦^{とよ}えが、朗々とひびくように感じた。能楽の調子とはまったく

離れた琉球の音楽で全篇をつらぬこうと考えたのも、いつかのことであったか。どのようにしてそれを思いついたかも、物語組立ての経緯とともに、もはやさだかではないが、そのことがすでに、能楽とは別のところにとびだしている証拠ではないか。

冊封副使徐葆光の質問にかくされた下心は、察しがついた。薩摩と清国との両属の下にあるとはいえ、両属ということが公然と知られているのは薩摩のことだけで、清国は知らないことになっている。琉球国が清国の冊封を受けることとひきかえのようにして、清国との交易の益を受けてきたが、その利益を薩摩がさらに受けるためには、この秘密が必要なのだ。しかし、この秘密は公式のことであって、清国ではすでに内実を知りつくしているという噂もある。たしかに薩摩入りから百十年もたてば、そのあたりが真実のことだろう。そのことを才人の徐葆光が皮肉ったものと、受けとれないことはない。

しかし玉城朝薫は、そのことを察した上でなお、まったくの創作だと断言して憚らない思いをもっていた。言い切ってみると、いよいよその自信がふくれた。名誉の思いが胸のなかでますます華やいだ。

「玉城親雲上はよい仕事をしてくれました」

と蔡温もほめた。めったに他人をほめない自信家として世間では評判が高いが、その人物がほめた。あらためて自信と光栄の思いを、朝薫は抱いた。前年の閏八月に戯劇を作る

ことを王命で受けたとき、その光榮の思いに興奮したことを、あらためて思いだした。光榮にこたえるべく充実した、この一年間の仕上げであるといつてよい。

しかし、ここで尚敬がこれに相槌をうつように言った言葉が、朝薫をひとしれず動揺させた。

「私の代になって、世が変わる心地さえした」

過褒の世辞であるのか国王として真実の歎びであるのか、それは分らない。おそらく国王尚敬にしても、その境目は明白ではあるまいと思われる。

（世が変わる……組踊が世を変える……）

恐縮とともにこの思いを胸のなかでくり返しながら、一人の百姓の老女を思いだしていた。

（ウシ……）

今朝から上演にかまけて念頭を去っていたが、たしかにいまあらためて玉城朝薫の脳裏を襲ってくるだけの、十分な理由が、ウシにはあるはずだ。

この初老のユタ（巫女）にはじめて会ったのは二年前のことであるが、その那覇港浚渫普請の現場で出会った経緯からその後のたびたびの接触にいたるまで、玉城朝薫を多くは脅かしたのであるか励ましたのであるか、朝薫自身が判然とは思いだせないところがあ

る。

そのウシが朝薫の組踊のことを、「神に弓をひくもの」と言ったことがある。それは世を悪く変えるということではないか。いまの朝薫には、これだけの観衆を感動させた組踊が神に弓をひき、世を悪く変えるとも思えないが……。

ウシといえは、弥霸朝敏ねはちやうびんがいまどうしていることか。国王と同年という若さで、たえずひそかに玉城朝薫の仕事を脅かしているような弥霸朝敏も、世のなかを変える男ではないのか。朝敏は組踊をひと一倍観たかったであらうし、朝薫としても誰にもまして観せたい相手であったのに、と思う。今日の上演が終ったら、世間の評判もあらためて沸くはずであるし、そうなればこの愛すべき若い敵が、またなんらかの形で脅かしてくるのだろうか。

ただ、いまは国王の言葉を励ましとのみ受けとりたい。それがたまゆらの欲びかも知れないが……。

前 章

1

享保二年（一七一七）十月、季節はずれの暴風が島を襲って二日後に去った。

嵐が去ったあとの例にもれず、空が抜けるように蒼い。人間に禍を叩きつけておいて、嵐は去る。去るのか消えるのか分らないが、またいつの日か現れることを思えば、この空の美しさこそが曲者だとも思うこともある。あの美しい蒼さのなかに禍の神が宿っているのか。

浚渫工事をはじめて半年目である。秋の暴風はことさらに激しいもので、那覇港は無残な光景を呈した。船は舳^{もや}を固くし帆をたたみ、橋^{はばしち}を倒しているからまだよい。傷ましいのは浚渫工事の現場である。積みあげた石が崩れおち、浚えあげた土砂がまた流されて埋

まった。それだけではなく、死人さえ出たのだ。浚渫奉行・玉城朝薫は知らせをうけて駆けつけてきたが、事情を一瞬にして認めると、落胆よりむしろ屈辱をおぼえた。

（私の設計が間違っているというのか。神に試されているのか……）

奉行として、古来試みられたことのない設計をしたつもりである。それを嘲られたような思いさえした。

浚渫工事の奉行に任命されたのが昨年——享保元年（一七一六）の十二月であった。

三年後には清国から御冠船が到着する、というのが那覇港浚渫の動機である。一年後に国師の末吉親雲上蔡温（べいちゃんさいおん）が恒例により冊封要請のため北京へ渡ることがきまり、その前触れのように話しあいがなされた。

御冠船の渡来が近いというのに、那覇港はいま爛泥の滞積がいちじるしい、これを今のうちに浚渫しよう、と言いだしたのも、蔡温であった。玉城朝薫が国王によびだされて登城してみると、三司官（三人組の宰相）もそろった場で、冠船接迎の準備について蔡温だけがひとりで喋っているようなものであった。三司官のうち、一人は朝薫の岳父（むこ）の名護親方（なごうかた）であるが、ときたま朝薫へ視線を流して、苦い表情を見せた。いつものことだ、という顔であった。久米村の出がたまに高位につくところなる、という表情にも見えた。

久米村とは三百年前に中国の福建から集団で渡来して帰化した人たちの居留地である。

はじめは造船と航海術を琉球に教えるために明国政府から派遣されたが、久米村で琉球人になりきったあとは、琉球が明清と交流する上での窓口になってきた。唐通事はすべて久米村から出たし、彼国との往復文書の解説、作成には久米村を頼り、中華の文化も久米村の人士によってもたらされたものが多い。久米村なくしては琉球王国の文化は成り立たなかった、という誇さえ久米村にはある。「唐榮三十六姓」というよびかたには、晴れがましさがまわりついている。ただ、王府の枢要な地位には上れないものとされていた。その地位はほとんど首里の高家で占められてきた。その慣例をはじめて破った人物は、謝名親方である。琉球国の士族がみなもっている唐名でよべば鄭廻ていごという。享保をさかのぼること百余年前の慶長十一年、尚寧王の三司官に上った。たまたま薩摩入りときに在任したから、役後に薩摩にひかれて彼地で処刑されたが、その政治姿勢がもともと中国を重視して大和を軽視したために、薩摩を刺激して膺懲を蒙ることになったのだ、という人もいる。なかばは首里人士らしい恨みからである。

尚敬が十四歳で王位についたとき蔡温が国師に任じられたのは、久米村の第二の出世であったが、そのときはやくも、首里の人士のあいだで不安がささやかれたのは、やむを得ない。久米村流儀の専横が、また起りはせぬか……。その不安はまもなく現実味をおびるようになった。蔡温は一介の国師であり執政の職ではないのだが、彼自身はそれにこだわ

らず容赦なく政治に容喙したからである。ときに三司官が色あせて見えた。名護親方の表情は、それへの不満である。

しかし、蔡温はこの日も正論を吐いて三司官を凌いだ。彼には若いころ北京と福州へ留学して得た学問がある。それも地理、林学、土木などというもので、彼自身これを実理、実用の学とよんだ。その面に関しては抜群の説得力をもっている。浚渫の脇奉行に玉城朝薫を、と推挽したのは蔡温であることを、朝薫はこの場で知った。総奉行は本部もとぶ按司あんじと垣花かはな親方なうえーかたの両氏だが、これは地位で飾ったものであり、高齡でもあるから、実務はもっぱら脇奉行に頼ることになる。朝薫は土木について実務の経験もなく学もないが、あなたならできる、と蔡温がその場で言ったのである。朝薫より二歳だけの年長だが、はるかに高い権威を、朝薫は感じとらざるを得なかった。それは恐悅をも感激をもよんだ。

朝薫がお請けしたところで、蔡温はあらためて言った。

「那覇港の浚渫は何年かに一度は施しているが、こんどの工事で半ば永久的な保全を考えられないものか」

それは自分もいま、まさに考えていたところなのだ、と朝薫は叫びたかった。期せずして蔡温とおなじことを考えていたということが、無邪気にうれしかった。これはやはり、蔡温さまの期待にこたえるだけの能力を、自分が持ちあわせているということか。素人な